令和５・６年度姶良・伊佐地区研究協力校（学力向上：ICT 活用）

研究紀要

自立した学び手を育てる学習指導の在り方

―学び方の自己決定と振り返りの習慣化を通して―

令和７年２月１３日（木）

姶良市立柁城小学校

《　目　次　》

Ⅰ　研究主題設定の理由
1　教育の動向から　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
2　本校の研究の経緯から　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
3　本年度の研究の方向性　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

Ⅱ　研究主題についての基本的な考え方
1　「自立した学び手を育てる学習指導の在り方」について　・・・・・・・・・・・・・・　5
2　「学び方の自己決定と振り返りの習慣化」について　・・・・・・・・・・・・・・・・　6
3　研究の構想　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

Ⅲ　研究内容
1　学び方を自己決定する場の在り方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
2　学び方を振り返る場の在り方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
3　習慣化を図る取組　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12

Ⅳ　各教科の実践事例
1　国語科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　15
2　社会科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17
3　算数科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19
4　理科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　21
5　体育科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　23

Ⅴ　研究の成果と課題
1　研究の成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24
2　今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　25

主な参考文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　25

Ⅰ　研究主題設定の理由

1　教育の動向から

国は、令和５年６月、将来の予測が困難な VUCA の時代と呼ばれる社会状況であることなどを背景に、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」をコンセプトとした第４期教育振興基本計画[1)]を閣議決定した。本計画では、基本的な方針としてグローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成や誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進等が示されている。

これを受け県は、令和６年２月、「夢や希望を実現しともに未来を創る鹿児島の人づくり～誰もが幸せや豊かさを感じられる地域や社会を目指して～」を基本目標とする、第４期の鹿児島県教育振興基本計画[2)]を策定した。本計画では、具体的人間像として「知･徳･体の調和がとれ、主体的に考え行動する力を備え、未来の社会の創り手となる人間」等が掲げられ、施策の方向性として「未来の社会の創り手となる資質･能力を伸ばし、社会で自立する力を育む教育の推進」等が示されている。

姶良市においては、平成 24 年度の教育振興基本計画[3)]策定以来、教育の最終目標を「自立」と捉え、教育理念「古から未来への架け橋　～新しい風に乗って市民総ぐるみ（協働）による自立の教育を目指して～」の下に諸施策を推進している。中でも学校教育においては「学ぶ力の確立」と「人と関わる力・耐性の確立」による自尊感情の高揚を目指し、特に小学校においては「学び方の確立」と「学びへの興味・関心」が重視されている。

これらの指針からは、子供たちの自立を目標とした学習指導が求められていることが分かる。そして、そのためには、県教育委員会通知[4)]及び「学びの羅針盤」[5)]に示されているように、「学習者主体の授業」によって個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、主体的･対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進することが、資質･能力の育成のために求められている（**図1**）。そこで、本校でもこのような教育の動向を踏まえ、研究の方向性を見定めたいと考えた。

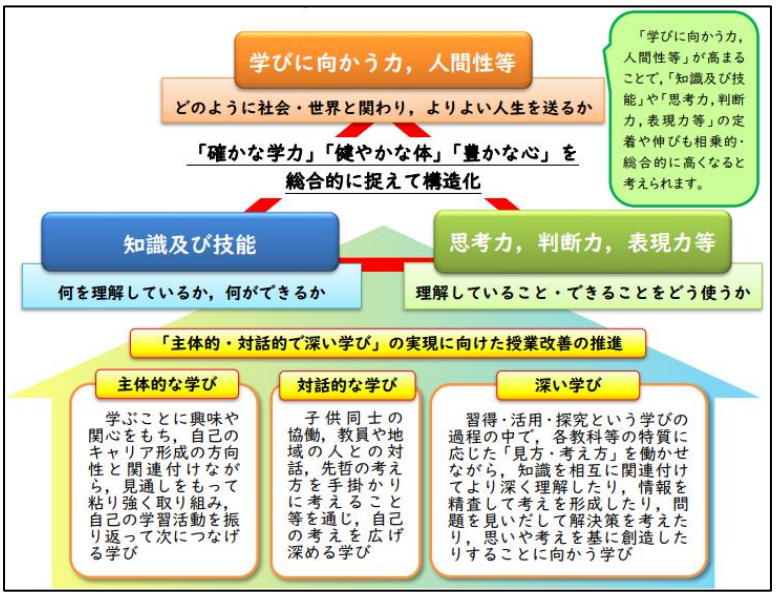


図１「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進による資質・能力の育成（「学びの羅針盤」より）

1）文部科学省「第４期教育振興基本計画」令和５年６月 16 日
2）鹿児島県教育委員会「教育振興基本計画」令和６年２月
3）姶良市教育委員会「教育振興基本計画」平成 24 年３月、「第２次教育振興基本計画」令和４年３月
4）鹿児島県教育委員会鹿教義第 432 号「『主体的・対話的で深い学び」の視点からの一層の授業改善に向けて（通知）』令和５年３月 31 日
5）鹿児島県教育委員会「学びの羅針盤」令和６年３月

2　本校の研究の経緯から

(1)　前研究（令和３・４年度）の概要と成果・課題

令和元年 12 月、「Global and Innovation Gateway for All」（全ての子供たちにグローバルで革新的な扉を）の理念の下、GIGA スクール構想が全国で本格スタートした。この理念を本校でも実現すべく、研究主題を「学ぶ意欲を高め、確かな学力を育成する学習指導法の研究－主体的・対話的で深い学びにつながる、ICT 機器の効率的・効果的な活用を通して－」とし、次のような取組を進めた。

令和3年度の主な取組	令和4年度の主な取組
ア　タブレット端末の特性と有用性の共通理解 イ　学習過程における ICT 機器を活用する場の明確化 ウ　ICT 機器の効率的・効果的な活用 エ　研究授業を通した成果と課題の明確化 オ　教師の情報リテラシー向上を図る工夫	ア　具体的な活用モデルの考察 イ　研究構想の見直し ウ　各学年による実践授業 エ　児童の情報リテラシー向上を図る工夫

【成果】

タブレット端末を活用した授業の展開モデルの作成により日常的な活用が進み、授業のねらいを踏まえた効果的、効率的な活用法が見えてきた（**図２**）。

【課題】

「使う」ことが目的ではなく、教科の特質や見方・考え方をより意識し、ツールとして「使いこなす」ことができるようになる必要がある。

図２　児童用タブレット端末を活用した授業の展開モデル[6)]

6）姶良市立柁城小学校「令和3・4年度姶良・伊佐地区研究協力校（学力向上：ICT 活用）研究紀要」令和4年 10 月 27 日

⑵　昨年度の研究の概要と成果・課題

ICT 機器の効率的・効果的活用をより深め、中央教育審議会答申（令和3年）[7]で示された「令和の日本型学校教育」の推進を図るために、研究主題を『主体的・協働的に ICT を活用し、表現することのできる児童の育成～個別最適な学びと協働的な学びの研究～』と設定した。研究推進に当たっては、校内における OJT（On the Job Training）の推進を図るとともに、教師自身が個別最適な学びや協働的な学びを体験することが重要と考え、各自の興味・関心に基づいて選択した教科等グループを中心とした研究スタイルを試みた。また、これと並行して、姶良市モラリティー・インプルーブメント実践発表校として、本校児童の課題であった「自己肯定感」の育成に関する研究実践にも取り組んだ[8]。

主な取組は次のとおりである。

令和5年度の主な取組
ア　興味・関心に基づく教科等グループ（国語、算数、図画工作、特別支援教育、ICT）の編制
イ　「使う」から「使いこなす」を意識した ICT 活用と、それを生かした多様な表現方法の検討
ウ　教科等グループによる各教科等の特質を踏まえた授業の実践、検証
エ　自己肯定感の育成に資する ICT 活用の検討　※ モラリティー・インプルーブメント実践発表と関連
オ　各教科等グループによる成果報告会

【成果】

・　教科等グループで探究的に研修を進めたことで、教師自身が個別最適な学びや協働的な学びの必要性や楽しさを実感することができた。特に、「自分なりに考えて実践してみた。」など主体的に検証授業に臨んだという感想が多く得られた。

・　多様な表現方法や自己肯定感の育成に資する多くの実践を交流でき、それらを日々の実践に生かすことができた。特に、学習者主体の授業は、自己肯定感の向上につながることが感じられた（**図３**）。

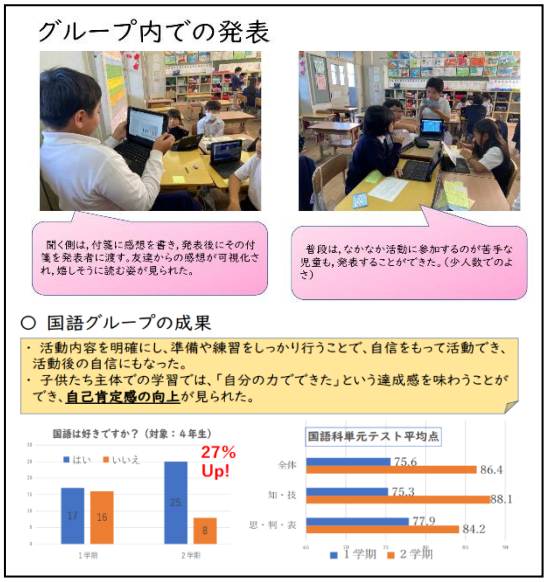


図３　国語班の研究成果（一部分）

【課題】

・　各教科等グループで作成した多くのデータ等の成果物を共有財産として蓄積し、次年度以降効率的に活用していけるよう整理の方法を検討する必要がある。また、児童の成果物や振り返りの記録も学習ログ（学習履歴）として活用できるよう手立てを検討する必要がある。

・　児童が自立した学び手となっていけるよう、自身の学びを深めるために必要な学び方を自覚し、自己選択できるような力を育成していく必要がある。

7）中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」令和３年１月 26 日

8）鹿児島県教育委員会「令和５年度心の教育振興会議提言　学校・家庭・地域で育む『かごしまっ子の心』」

3　本年度の研究の方向性

令和6年3月に県が「学びの羅針盤」を改訂したことを受け、学習者主体の授業の実現に向けて学習指導要領の規定、「学びの羅針盤」が示すポイント、本校児童の実態を基に研究の方向性を再検討した。

【学習指導要領 総則編】 ※一部抜粋

① 見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動の充実
　児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れること。
② 課題選択及び自主的、自発的な学習の促進
　児童が自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなど、児童の興味・関心を生かした自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること。

【「学びの羅針盤」】 ※一部抜粋

「学習者主体の授業」は、具体的にどのように進めればよいですか。
Answer：育成する資質・能力を踏まえた上で子供に学習を委ねる場面や、子供自身が自己選択・自己決定できるような機会を意図的に設定しながら進めていくことが考えられます。

【児童の実態】令和５年度及び令和６年度全国学力・学習状況調査

質　　問	年度	本校	県	全国
5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。	R5	29.9	28.1	30.5
	R6	29.5	27.6	29.5
5年生までに受けた授業は、自分に合った教え方、教材、学習時間などになっていましたか。	R5	40.2	39.4	37.3
	R6	39.7	36.0	34.4

※ 数値は、「当てはまる」と回答した児童の割合（%）（4 つの選択肢の内、最も肯定的な回答の割合）

※ このほか、第3～6学年児童を対象に独自のアンケート調査を実施した。結果は、p.24、25のとおりである。

また、本校においてこれまで重視してきた授業終末での振り返りについて児童の記述等を分析したところ、内容面に関する振り返りは多いものの、自身の「学び方」に関する振り返りは少なく、自らの学習を調整しようとする側面や粘り強く学習に取り組もうとする側面は不十分であることがうかがえた。

そこで、本年度は、学習者主体の授業を通して育成する児童像を県や市の教育振興基本計画を参考に「自立した学び手」と捉え、そのような児童を育成するために「学び方」を意識した取組の充実を図ることにした。その際、学び方の自己決定と振り返りの習慣化を図ることが主体的に学習に取り組む態度を育成する上で効果的であると考え、研究主題及び研究仮説を次のように設定した。

【研究主題】

自立した学び手を育てる学習指導の在り方
―学び方の自己決定と振り返りの習慣化を通して―

【研究仮説】

各教科等の学習指導において、児童自らが問題解決の方法を決定し、振り返る習慣を身に付ければ、自分に合った学び方を見付け、自立した学び手に育っていくだろう。

Ⅱ　研究主題についての基本的な考え方

1　「自立した学び手を育てる学習指導の在り方」について

(1)　「自立した学び手」とは

辞書によると「自立」とは、「他への従属から離れて独り立ちすること。他からの支配や助力を受けずに、存在すること。」とある。児童はやがて生活上の自立や社会的な自立を果たしていかなければならないが、そのためには夢や目標をもち、その実現に向けて自身の力で学び続けていくことが必要である。つまり、自らの課題を解決するために見通しを立て、行動を起こし、その結果や過程を自分なりに振り返り、次の課題解決に生かしていく力を育成していくことが必要である。

OECD（経済協力開発機構）は、このような「見通し（Anticipation）→行動（Action）→省察（Reflection）」のサイクル（以下、AAR サイクルという）を「Learning Compass2030」において学習の枠組みとして提案している（**図４**）が、本校においてもこのサイクルを自身の力で回していける児童を育てていくことが大切だと考えた。そこで、児童にも分かりやすく、また学習の主体者であることをより意識できる表現として、AAR サイクルを「『決める』→『やってみる』→『振り返る』」と言い換え、目指す姿とし（**図５**）、その具体的な姿を**図６**のように設定した。

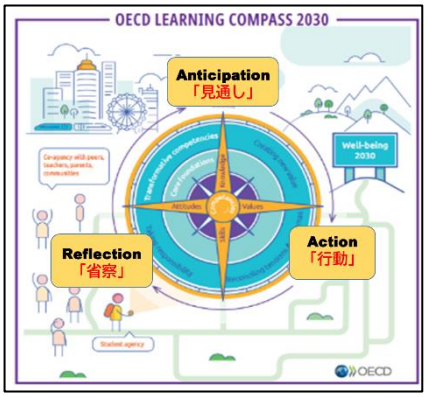


図4　OECD Learning Compass2030
（原典に一部加筆し作成）

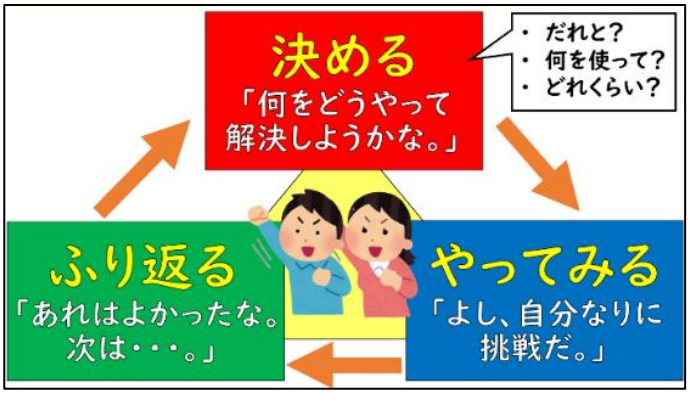


図５　本研究が目指す「自立した学び手」の姿（本校版ＡＡＲサイクル）

自己の課題解決に向けて、解決方法を自分で決め、それを実践し、その成果や課題を振り返りながら学び続ける児童

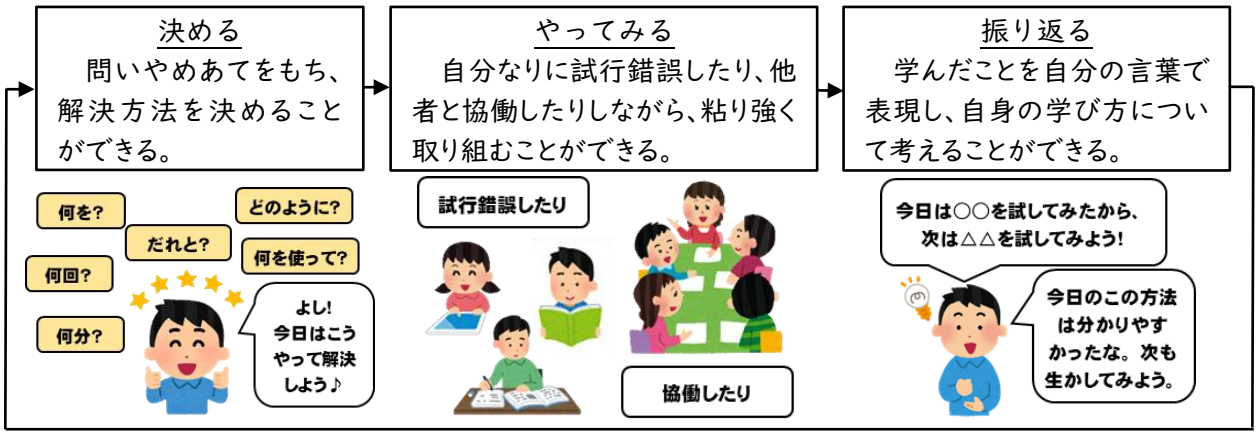


図６　具体的な目指す児童像

⑵　「自立した学び手を育てる学習指導」とは

学習指導を進めるに当たっては、各教科等の特質を踏まえた見方・考え方を働かせることが、各教科等が目標とする資質・能力の育成には不可欠である。よって教師は、児童が見方・考え方を働かせながら見通しをもったり、行動したり、振り返ったりすることができるよう、「見方・考え方」を中核に置いた学習指導を行うよう努める必要がある（**図７**）。児童が、「問題を解決するときに役に立った見方・考え方は何か。」「どのように学んだか。」を振り返り、次の学びへつなげていけるよう、このサイクルを習慣化し、自らの学習を調整しようとする能力を多岐に発揮できるよう育成を図ることが大切だと考えた。

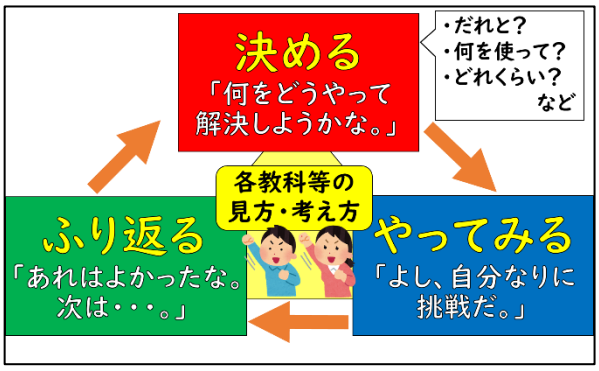


図７　各教科等の見方・考え方を中核に置いた学習指導のイメージ

次の実践例は、数学的な見方・考え方を働かせ、約数のきまりを見いだした授業の概要である。このように、「決める」→「やってみる」→「振り返る」というサイクルを学習過程として児童が経験し、その中で各教科等の見方・考え方を働かせ資質・能力の育成を図る学習指導を行うことが大切だと考えた。

実践例：第5学年　算数科「倍数と約数」

【約数のきまりを見付けたり、公約数・最大公約数について知ったりする学習活動】

○「決める」場面

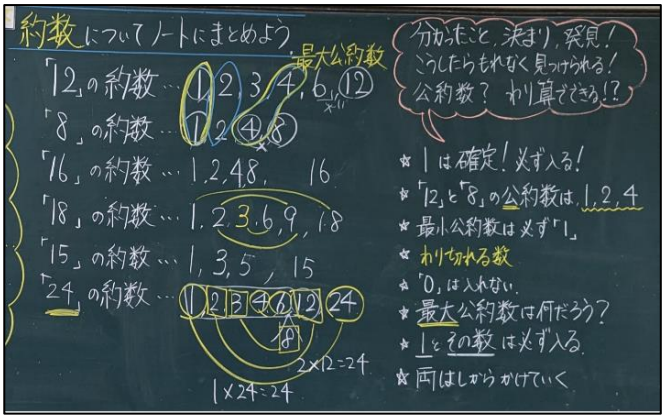
➡12 の約数を見付ける方法を自己選択する。

○「やってみる」場面

➡ 複数の数字の約数を関連付けながら捉え、共通点や発展的な内容（公倍数）について気付いたことをまとめる。

○「振り返る」場面

➡ タブレット端末を活用し、100 字程度で自身の学び方を振り返る。



＜数学的な見方・考え方を働かせ、見いだした約数等のきまり＞

2　「学び方の自己決定と振り返りの習慣化」について

文部科学省（令和5年）[9]は、PISA2022 が新型コロナウイルス感染症の影響を調査した結果の一つとして、「学校が再び休校になった場合に自律学習を行う自信があるか、という質問に対する回答で、自信がないと回答した生徒が日本は非常に多かった。」ことを挙げ、「自ら思考し、判断・表現する機会を充実したり、児童生徒一人一人の学習進度や興味・関心等に応じて教材や学ぶ方法等を選択できるような環境を整えたりするなど、自立した学習者の育成に向けた取組を進めていく必要がある。」と指摘している。

9）文部科学省「OECD 生徒の学習到達度調査 PISA2022 のポイント」令和 5 年12月5日

児童自らが「自分のために」教材や学び方を選択し、それが「自分のために」なっていたのかを振り返り、自己調整を繰り返していくこと、すなわち習慣化していくことで学習内容に必要感を得て、自立的に学習を行える児童が育つのではないかと考える。このことは、生徒指導提要[10]において「全ての児童生徒を対象とした発達支持的生徒指導の場」としての授業をつくるに当たって「自己決定の場を提供する授業づくり」が示されていることとも密接に関連すると考える。児童に主体的な自己選択・決定や振り返りを促すには、学習指導と生徒指導を一体として捉え、自己指導能力を育成していくことが欠かせないが、この自己指導能力の獲得を支えるものとして、ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感を育むことが重要である。本校では、昨年度のモラリティー・インプルーブメント実践発表の取組を継続し、全ての教育活動を通して自己肯定感を育むよう取り組んでいるところであるが、授業において学び方の自己決定を促す取組も児童の自己肯定感を育み、自己指導能力の獲得につながるものと考える。そして、指導者が傍らにいない自習や家庭学習においても主体的な選択、決定ができるようになり、自立した学び手となっていくことが、知識・技能のみならず思考力、判断力、表現力等や主体的に学習に取り組む態度も含んだ学力の向上につながるものと考える（**図８**）。

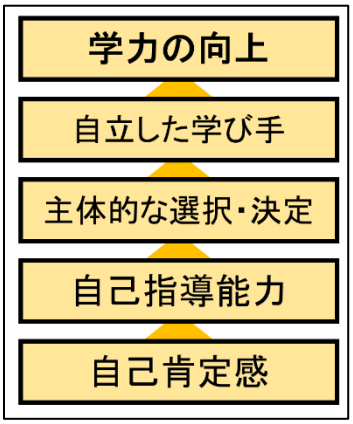


図８　自己肯定感の育成と学力の向上

３　研究の構想

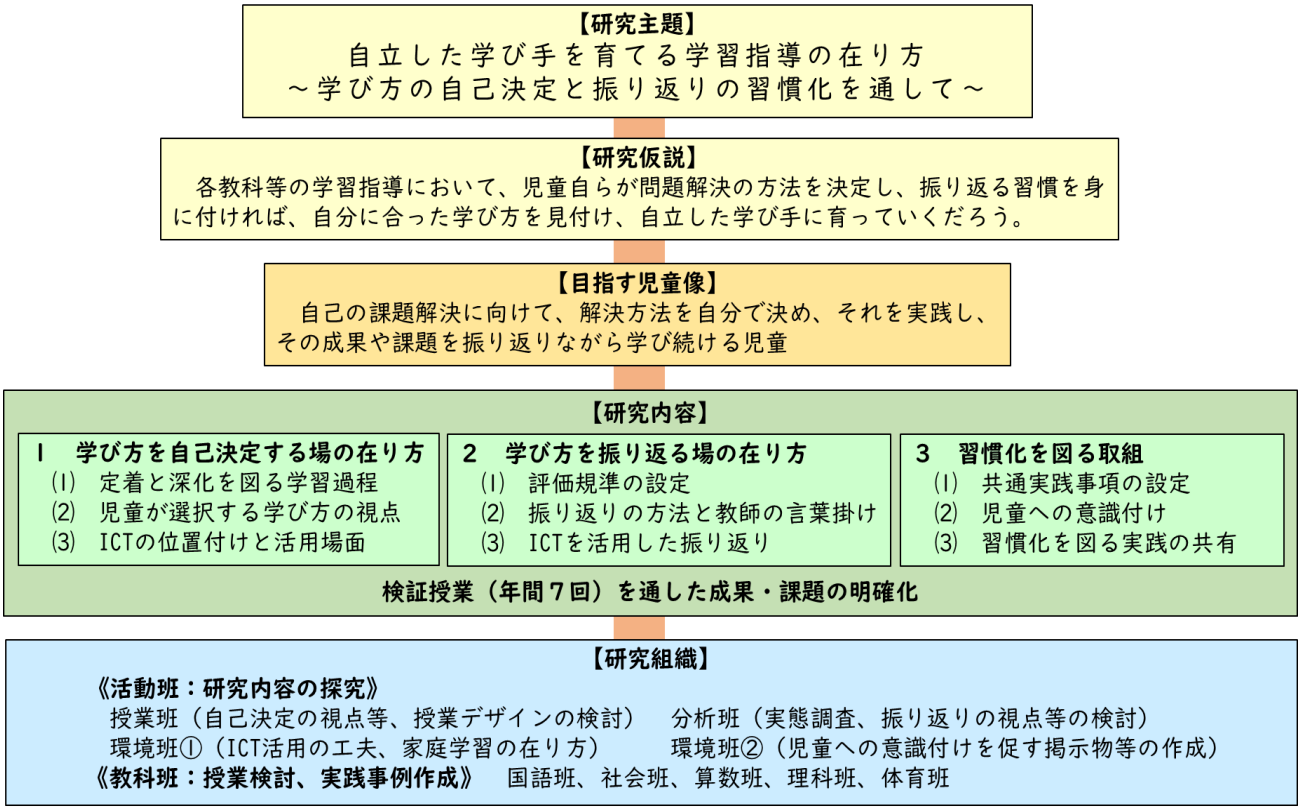


図９　研究構想図

10）文部科学省「生徒指導提要」令和４年１２月

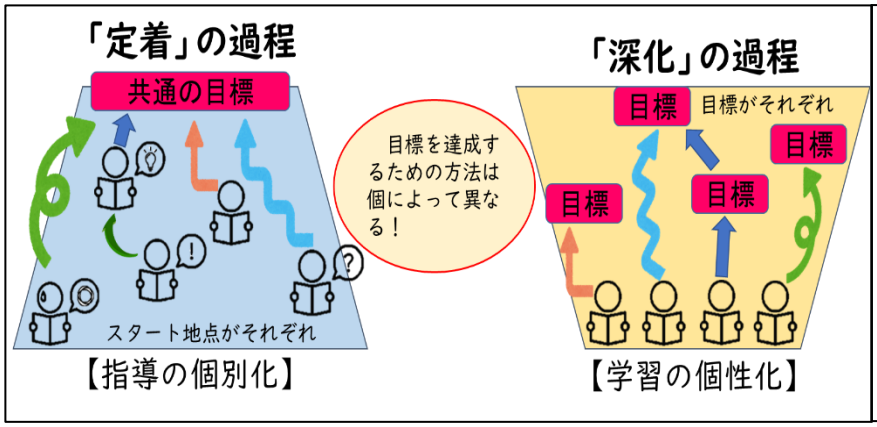
Ⅲ　研究内容

1　学び方を自己決定する場の在り方

(1)　定着と深化を図る学習過程

職員研修を通して「学びの選択」の重要性は共通理解できたものの、「学習内容を定着させる時間確保が必要である。」、「学習課題を教師側が設定したい場面等もある。」といった意見を基に学習過程を大きく二つの過程に分けることとした。

中央教育審議会答申（令和3年）[7]では、「個別最適な学び」の視点として「指導の個別化」と「学習の個性化」の必要性が述べられている。そこで、この視点を参考にし、目標は全ての児童共通であり、目標達成までの方法を児童が選択できるよう働きかけを工夫する学習過程を「定着」の過程、児童が自身の興味・関心等に応じた課題や活動を選択し、学習を深め、広げることができるよう働きかけを工夫する学習過程を「深化」の過程とし、単元等のまとまりを見通して計画的に位置付けるようにした（**図10**）。位置付けるに当たっては、一単位時間の中に「定着」と「深化」の過程のどちらも設定する場合や、どちらか一方のみとする場合など多様に考えられるため、教科等の特質や発達の段階、学習内容やねらいを十分検討し、設定するようにした。



「定着」の過程
一定の目標を全ての児童が達成することを目指し、個々の児童に応じて異なる方法等で学習を進められるよう働きかけを工夫する。（指導の個別化）

「深化」の過程
個々の児童の興味・関心に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げられるよう働きかけを工夫する。（学習の個性化）

図10　「定着」と「深化」の学習過程のイメージ

(2)　児童が選択する学び方の視点

鹿児島県総合教育センター（令和5年）[11]は、学習者が選択する「学びの選択」の視点を「道具・活動」、「解決方法・考え方」、「課題・めあて」、「学習時間・ペース」、「学習形態・スタイル」」の5点で示している（**図11**）。そこで、これを参考に、各時間の授業のねらいを踏まえ、その達成のために効果的であると考えられる視点を授業者が

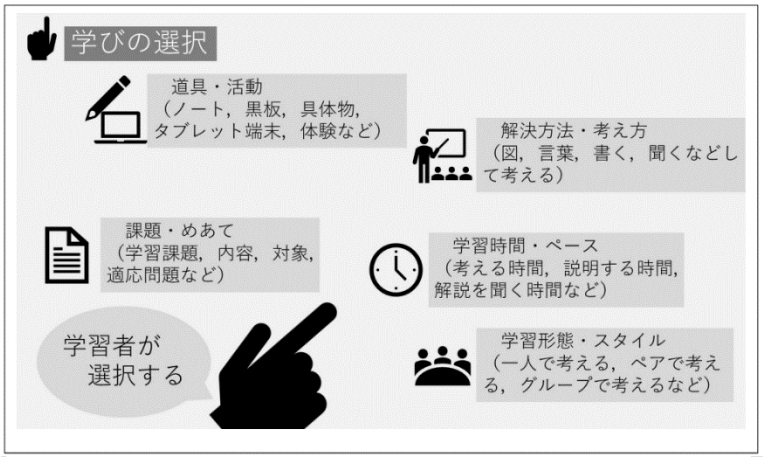


図11　学習者が選択する「学びの選択」の五つの視点
（鹿児島県総合教育センター研究紀要より）

11）鹿児島県総合教育センター研究紀要第128号「学習者主体の学びのデザイン」令和6年3月

設定するようにした。その際、選択の視点を児童向けにイラスト化し黒板に貼るなどして活用することで、児童に対しても学習の主体者としての意識付けを図ることにした（図 12）。

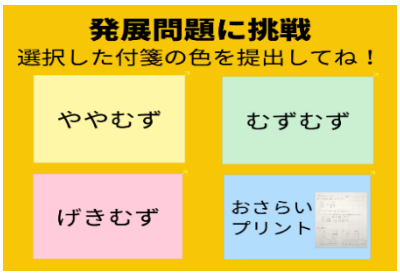
図 12　選択の視点の黒板カード

⑶　ICT の位置付けと活用場面

ICT の活用に当たっては、前研究の課題を踏まえ、「使う」ことを目的とするのではなく、学習用具の一つとして各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせるために効果的な場面で「使いこなす」ことを目標として活用を図った。したがって、学び方を自己決定する場面でも効果的であるかを十分検討し、活用するようにした。

ICT を活用した自己決定の場面では、選択肢が一目で分かるような活用方法（事例1）や、自己決定したものを色分けしてグループ活動で生かすような活用方法（事例2）、誰が何を選択したのか一覧で表示して意見交流しやすくするような活用方法（事例3）などを実践した。

また、一斉に活用する場面だけでなく、個人の使いやすさに応じてノートの代わりにタブレット端末を使用したり、自分の動きの確認（事例4）や発表の事前準備に使用したりするなど、タブレット端末等の活用に関しても学習のねらいに応じて自己選択できるようにした。

<table>
<tr><th>事例1：課題選択における活用</th><th>事例2：ジグソー学習におけ活用</th></tr>
<tr><td>発展問題等の課題選択の際に選択内容を可視化することで、教師は習熟度等が把握しやすく、児童は同じ問題に取り組んでいる児童が見付けやすくなった。
  </td><td>社会科（6年歴史学習）でのジグソー学習の際に活用。興味・関心に応じて調べたり、まとめたもの等を共有したりする際に活用。
 </td></tr>
<tr><th>事例3：立場を明確化にする際の活用</th><th>事例4：練習方法の自己選択における活用</th></tr>
<tr><td>「どの武将が好きか」を問い、各武将が何をしたのかを調べ意見交流する場面。各自の立場が一覧でき、交流の活性化につながった。
 </td><td>「深化」の過程で、友達にタブレット端末で動きを撮影してもらい、自己の課題に応じた練習方法の選択に生かした。
 </td></tr>
</table>

2　学び方を振り返る場の在り方

(1)　評価規準の設定

姶良市教育振興基本計画[3)]の目指す教育の姿（図 13）には、『学ぶ力の確立』のために小学校段階では「学びへの興味・関心」と「学び方の確立」が示されている。幼稚園で培ってきた「学びへの芽生え」から、中学校で求められる「自覚的な学び」へと、自立へのバトンパスをスムーズに行うために、低・中・高学年でどのような姿を目指すのか検討を行い、設定した。

低学年は、例えば体育科では「〇〇遊び」の活動を楽しく行う中で無意識に見方・考え方を働かせ、学んでいく段階であると捉えられる。そのような活動を通して、「自分の選んだ方法でよかった。」、「できて嬉しかった。」などといった自身の活動を自覚でき、学ぶことの楽しさを知り、物事への興味・関心を高めることができる児童の姿を目指したいと考えた。

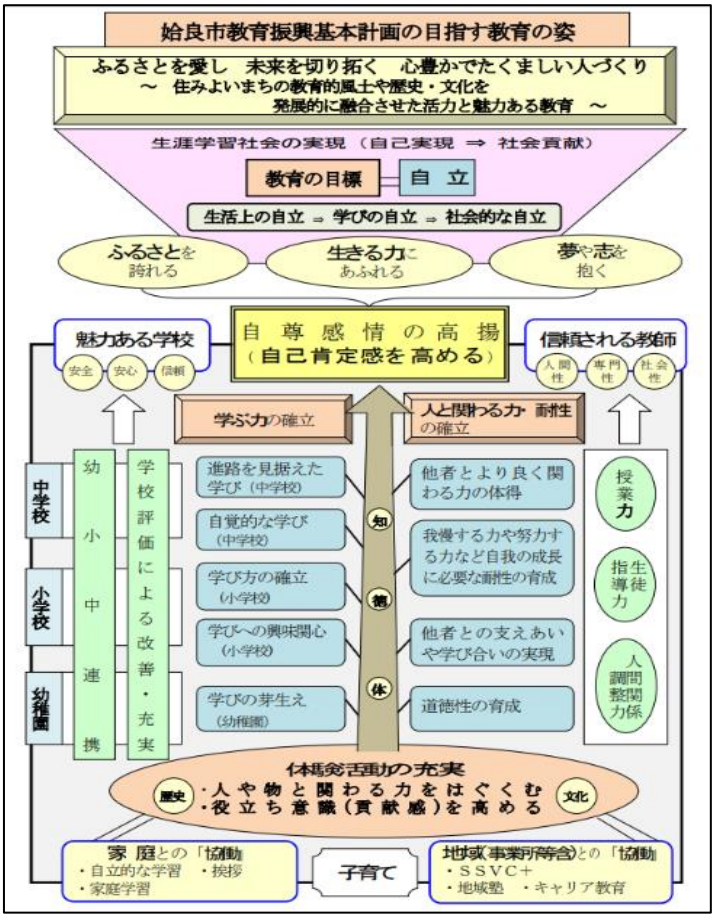


図 13　姶良市教育振興基本計画の目指す教育の姿

一方、高学年は、「学び方の確立」がある程度できている状態で中学校へ進学させたいと考え、学び方（特に学習方法面）の振り返りを意識的に促し、実際に取り組んだ成果を他者と比較したり、自分が設定した目標と比較したりしながら客観的に分析することができ、「次はここを改善したい。」といった自らの学習を調整しようとする児童の姿を目指した（図 14）。

低　学　年	中　学　年	高　学　年
自分で決めたことを自覚でき、学ぶことの楽しさを知り、物事への興味・関心をもつことができる児童。	自分で決めて取り組んだことについて、他者と比較したり、自分で立てた目標と比較したりして客観的に振り返ることができる児童。	自分で決めて取り組んだことについて、他者と比較したり、自分で立てた目標と比較したりして客観的に分析し、「ここを改善したい」といった自己調整を働かせた振り返りができる児童。
例） ・ 上手にできた。 ・ 一緒に仲良くできた。 ・ こっちを選んでよかった。 ・ ちょっと難しかった。 ・ できて嬉しい。	例） ・ これを選んだことで〇〇が分かった。 ・ 友達と比べてたくさんまとめることができた。 ・ 目標の半分しか終わらなかった。	例） ・ 今日は友達としたけれど自分で考える時間が短かったから計画していたところまでいけなかった。次は一人で考えて分からないところだけ聞きに行きたい。

あくまでも規準です！児童の振り返りを尊重しながら促していきます。

図 14　発達の段階に応じた目指す子供の姿

⑵　振り返りの方法と教師の言葉掛け

姶良市学力向上アクションプラン推進事業加治木中ブロックでは、「振り返り」の充実を図っている。ここ数年、本校では、四つの観点（**図 15**）から自由に発言させたり、振り返り用紙に記入させたりして学びの振り返りを行ってきた。

児童の振り返り内容を分析したところ、「①分かったこと」と「③できるようになったこと」の観点で振り返る児童がほとんどであることが分かった。そこで、学習内容面だけでなく、学び方（学習方法面）はどうだったのかを振り返られるような方法、教師の言葉掛けを検討し、記述例（**図 16**）を作成した。

図 15 振り返りの四つの観点

振り返りの方法	低学年･･･発表、ノート	中･高学年･･･学習支援アプリ
教師の言葉掛け	「自分で決めたことをしてどうだった？」という発問でより**主体的に振り返られるようにする**。その際、書くことに抵抗感を抱く児童には今まで活用してきた「振り返りの四つの観点」（**図 15**）を意識したり、振り返りの記述例（**図 16**）を参考にしたりするよう働きかける。振り返りの内容が学習内容面のみに偏っている場合は、学び方についてはどうだったのか振り返るよう促す。	

道具についての振り返り
- タブレットを使ってまとめてみたけどノートに書いた方が見やすいような気がしたので次はノートに書いてやってみたい。
- 言葉だけでは分からなかったので実物を使って考えてみたいと思った。
- ヒントカードを使ったので、1人で考えて進めることができた。

学習形態についての振り返り
（1人・ペア・グループ）
- 1人でじっくり考えてみたけれど、よくわからなかったので、次は友達と相談してやってみたい。
- 友達とわからないことを一緒に考えたので理解できた。
- グループで話し合うと自分の考えに自信をもって進めることができた。
- ペアでいっしょにやったらできたので今度は1人でやってみたい。

学習時間についての振り返り
- 自分で考える時間が短かったので次はもう少し自分の考える時間を長くしたい。
- 書く時間が長すぎてしまったので、もう少し説明する時間をつくってみたい。
- 友達に聞く時間がなかったので次は聞く時間を増やしたい。

図 16　振り返りの記述例

⑶　ICT を活用した振り返り

振り返りを学習支援アプリで行う効果として、「共有」と「蓄積」が行いやすいことが挙げられる。振り返りを他者と共有することで内容のブラッシュアップを図ることができる。また、蓄積を重ねることで次の学び方を決定する際に参考となり、自己調整が図りやすくなる。

このような効果や各教科等の見方･考え方を考慮しながら、発達の段階に応じた様々な振り返りを実践した。以下は、その例である。

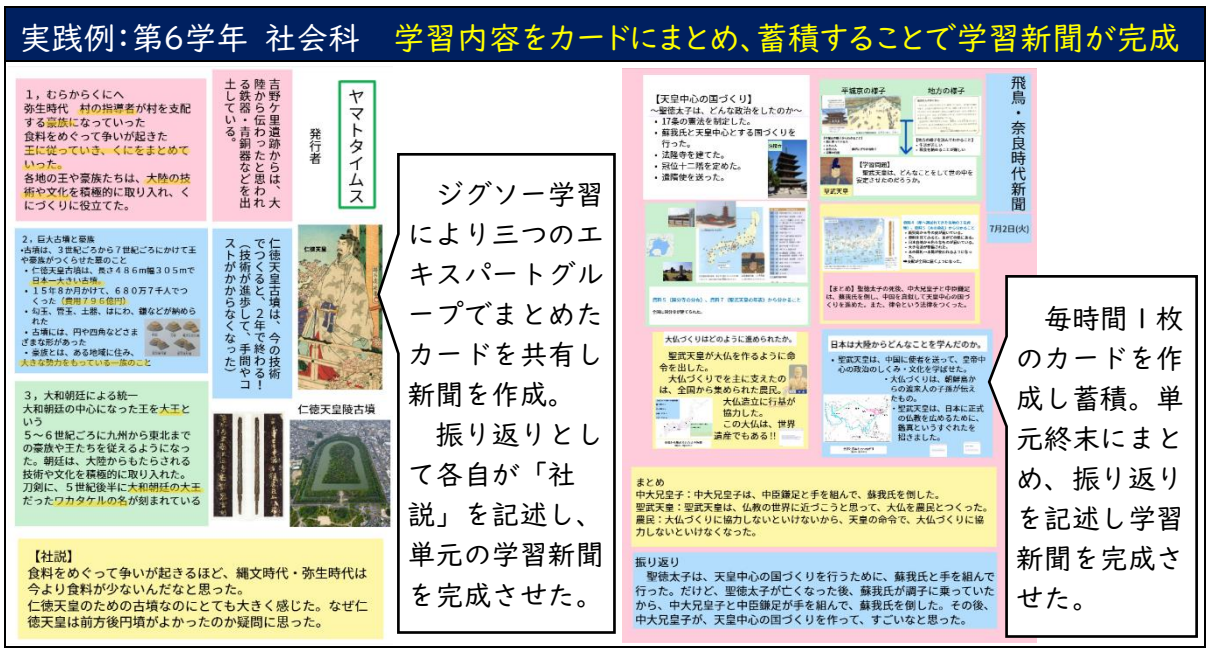
実践例：第4学年　体育科　動画提出、5段階の自己評価、言葉での振り返り

体育ふりかえりカードマット運動）

①全ての授業でめあてにむかってがんばることができた。	5・4・3・2・1
②自分のかいぜん点を見つけることができた。	5・4・3・2・1
③自分の苦手を良くしようと場所を選んで行動することができた。	5・4・3・2・1
④友達と協力して活動することができた。	5・4・3・2・1
⑤マット運動の授業は楽しかった。	5・4・3・2・1

マット運動の振り返り、成長したと思うこと、授業の要望
(要望は書いても書かなくてもよい)

この授業受ける前よりは、きれいに側転をできてたけど、足上げで白のテープに届かなかったからもっときれいになりたい。



3　習慣化を図る取組

(1)　共通実践事項の設定

AAR サイクルを日々の授業で習慣化していくために、学年系統表を作成した（**表 1**）。ただし、これは目安であり、授業のねらいに応じて柔軟に判断することが大切だが、低学年段階でも示された選択肢から自己決定したり、そのことについて振り返ったりする経験を積ませたいと考えた。「何を学んだか」「どのように学んだか」「どこまでできるようになったか」といった振り返りの蓄積は、「学習者の学びをより正確に評価したり、次のステップに向けて的確な支援を実現したりできるようになることが期待される」と中園[12]が述べているように、より適切な指導と評価の一体化につながる。加えて、児童にとっては学び方や学習内容についての自己評価の質が高まり、自己調整しながら学習を進める力が高まっていくことになると考える。こうして児童の自己指導能力が高まり、自身の資質・能力向上のためにより適切な自己選択・決定ができるようにすることが、「自立した学び手」の育成に重要だと考えた。

表１　ＡＡＲサイクル学年系統表

全学年共通実践事項　A（決める）➡A（やってみる）➡R（振り返る）サイクルを回す！ 自分で決め、やってみる。そして、「やってみてどうだった？」と振り返る機会をつくる。						
	１年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
主な活動	・選択肢から選ぶ ・やってみる ・「できた」や頑張りを実感する ・次の意欲をもつ	・選択肢から選ぶ ・やってみる ・◎・○・△等で振り返る ・次の意欲をもつ	・自分で選ぶ ・やってみる ・◎・○・△等で振り返る ・次の目標を立てる	・自分で決める ・いろいろ試す ・言葉で振り返る（80 字程度） ・次の目標を立てる	・自分で決める ・いろいろ試す ・言葉で振り返る（100 字程度） ・次の学び方を考える	・自分で決める ・いろいろ試す ・言葉で振り返る（150 字程度） ・次の学び方を考える
選択の視点	五つのうち一つ以上委ねる		五つのうち二つ以上委ねる		五つのうち三つ以上委ねる	
振り返りの頻度	一単元で１回程度		小単元で１回程度		可能な範囲で毎時間	

12)　中園新長「スタディ・ログ」とは？【知っておきたい教育用語】みんなの教育技術　令和４年１月 24 日

⑵　児童への意識付け

文部科学省が示す「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ[13]（**図 17**）を参考にすると、「自らの学習を調整しようとする側面」と「粘り強い取組を行おうとする側面」の双方を高めていく必要がある。そこで、全校朝会や各学級指導においては、夏休み中の学習や運動会への取組に関する指導の際にAARサイクルを示しながら、自分で目標を決め、実行し、振り返りを大切にすることを話し、振り返りを基に自分なりの目標を設定することや創意工夫したり、粘り強く取り組んだりすることの大切さについて話をするようにした。各教室には本校版 AAR サイクルを常時掲示することで、これが習慣化するよう意識付けを図った（**写真**）。また、授業等において「自分自身が学習の主体者である。」という意識を児童にもってほしいと願い、具体的にどのような学び方ができるとよいのかを示した「学び名人」（**図 18**）や「学び合いのルール」（**図 19**）、発達支持的生徒指導の視点から安心・安全な風土の醸成をねらいとした「間違いの5か条」（**図 20**）を作成し、全ての学級で児童に示した。

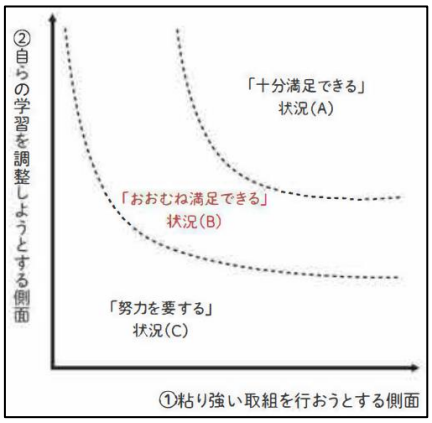


図 17　「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ

写真　本校版ＡＡＲサイクルの教室掲示（１年教室）

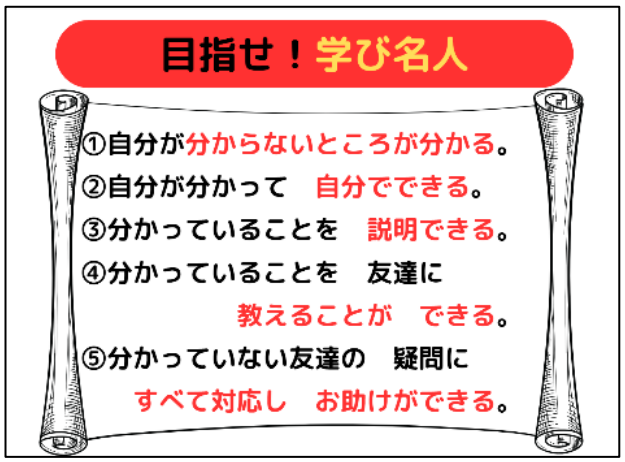


図 18　学び名人

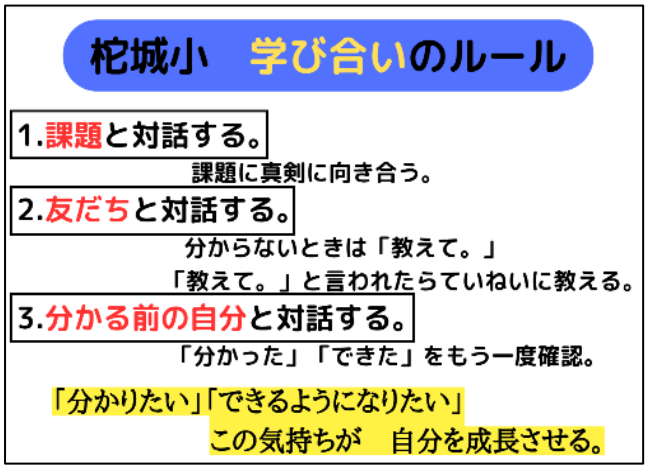


図 19　学び合いのルール

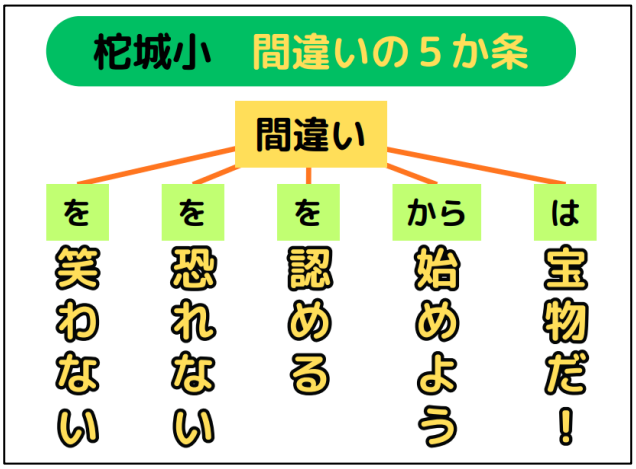


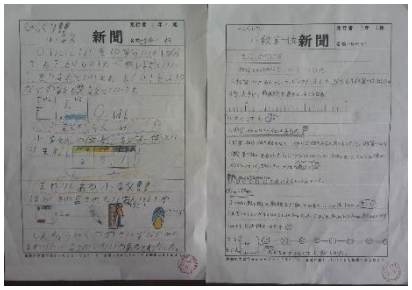
図 20　間違いの5か条

13）文部科学省　国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック（小・中学校編）令和元年６月

⑶　習慣化を図る実践の共有

各学年や学級においては、ここまで述べてきた考え方や共通実践事項を踏まえ、学び方の自己決定や振り返りの習慣化を図る取組を創意工夫しながら行い、実践例の共有と工夫・改善に努めた（**表２**）。

表２　各学年や学級における実践例

「決める」場面	「やってみる」場面	「振り返る」場面
5年：家庭学習の計画	6年：学び合い名人	全校児童：スタディバディ
家庭学習の計画を立てる取組。テスト結果等を参考に苦手な学習内容を振り返り、来週の時間割等を考慮しながら計画、実行する様子が見られた。	よりよい学び合いなどが見られた場面を取り上げ、掲示する取組。望ましい学び方を客観的に捉え、意識する様子が見られた。	隣の学級や異学年と家庭学習の内容や量、時間などを見せ合う取組。年３回実施し、効率的・効果的な家庭学習について話し合う様子が見られた。
6年：三色コップ	1年：具体物操作	3年：算数新聞
		
コップの色で自分が何を選択したのかを視覚的に示す取組。コップの口が上向きの時は「意見が欲しい」、下向きの時は「一人で考えたい」といった意思表示のツールとしても活用した。	算数の学習で具体物操作を通して量的な感覚を培う取組。休み時間にも鉛筆や定規、ブロックで机の長さなど身の回りの物の長さを図る様子が見られた。	家庭学習で、単元の終末に算数新聞を作成する取組。数学的な見方・考え方を働かせながら規則性や共通点などをまとめる様子が見られた。

Ⅳ　各教科の実践事例

1　国語科（第１学年　単元名「しらせたいな、見せたいな」）

＜単元の目標＞

知識及び技能	①　言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くことができる。 ②　助詞の「は」、「へ」及び「を」の使い方、句読点の打ち方、かぎ（「」）の使い方を理解して、文や文章の中で使うことができる。
思考力、判断力、表現力等	①　「書くこと」において、経験したことなどから書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりすることができる。 ②　「書くこと」において、語と語や文と文との続き方に注意しながら書き表すことができる。
学びに向かう力、人間性等	知らせたいものを丁寧に観察し、学習の見通しをもって見付けたことを文章にして伝えようとすることができる。

＜本時の目標＞　６／９

○　知らせるもののことがよく伝わるように、短冊カードを並べ替えることができる。
【知識及び技能】

○　伝え合う活動を通して、語と語や文と文とのつながりに注意し、文の構成を考えることができる。　【思考力、判断力、表現力等】

＜単元計画＞

	主な学習内容	定着	深化
1	学習計画を立て、知らせたいものを決める。	○	
2	知らせたいものをよく観察して絵を描く。	○	
3	見つけた特徴を短い言葉で書く。	○	
4	短い言葉をどのように文にすればよいか考える。	○	
5	短い言葉から考えた文を短冊カードに書く。	○	
⑥	短冊カードを並べ替えて、書く順序を考える。	○	
7	決めた順序で文章を書く。	○	
8	文章を読み返し、必要に応じて書き直す。	○	
9	書いた文章を友達と読み合い、感想等を伝える交流をする。		○

定着…　一定の目標を全ての児童が達成することを目指し、個々の児童に応じて異なる方法等で学習を進められるよう働きかけを工夫する。（指導の個別化）

深化…　個々の児童の興味・関心に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げられるよう働きかけを工夫する。（学習の個性化）

＜本時で期待する自立した学び手の姿＞

Ａ（決める）
最適な短冊カードの並べ方を調べるとき、学習形態（一人、グループ）や活動（音読、読む）について、自分に合った方法を選択することができる。

→

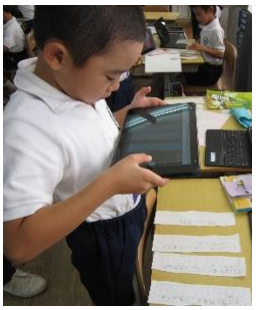
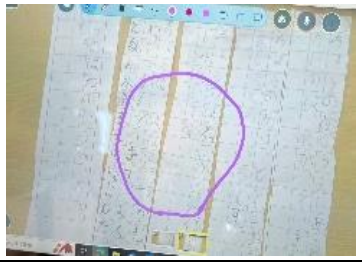
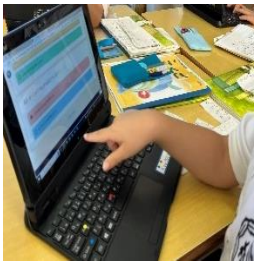
Ａ（やってみる）
タブレット端末で短冊カードの並びを撮影して記録しながら、分かりやすい順序になっているか、選択した方法で試行錯誤することができる。

→

Ｒ（振り返る）
学習方法や学びの内容について、できたことを自覚できる。タブレット端末のアンケート機能を用いたり、言葉で友達に伝えたりすることができる。

＜本時の実際＞

アイコンの意味	「課題・めあて」選択・決定	「解決方法・考え方」の選択・決定	「道具・活動」の選択・決定	「学習形態・スタイル」の選択・決定	「学習時間・ペース」の選択・決定	ICT の活用

過程(分)	主な学習活動		教師の具体的な働きかけ	
決める (10)	1　学習課題（問題、めあて）を立てる。 どんな順番で伝えたら分かりやすいだろうか。 2　解決方法を確認する。 短冊カードを並べ替えて，分かりやすい順番を見付けよう。		○　複数の順番を記録するために、その都度、タブレット端末で撮影し記録することを説明した。	
やってみる (25)	3　自分のしたい方法を選んで、分かりやすい順番になるように並べ替えてみる。 **学習形態・活動** 一人で音読してやってみる。 グループの友達の意見を聞いてやってみる。 4　できたところまでで、“なぜ”その順番が良いと考えるか理由を話し合う。  5　ポイントを踏まえて、分かりやすい順番に並び替える。	定着	○　対話活動の促進を図るとともに、学習に参加できない児童をなくすために、３～４人グループの机配置で進めた。 ○　学習形態や活動など、選択しやすいように、選択肢を常に確認できるよう掲示した。 ○　分かりやすく伝えるためのポイントを押さえることができるように、順番について、机間指導しながら“なぜ”と問いかけた。 ○　次時に記録を基に文章を書くことができるように、タブレット端末で一番分かりやすい並び方に印を付けるよう声掛けをした。 	
振り返る (10)	6　本時の学習内容と自分の学び方を振り返る。 		○　学びを自己評価したり、次の学習に生かしたりできるように、タブレット端末でアンケートによる学び方の振り返りを行った。 ○　学び方について新しい気付きができたり、考えを深めたりできたことを全体に発表させた。 ・友達と協力することができた。 ・タブレットを上手く使うことができた。	
評価	【観点】知識・技能、思考・判断・表現　　【方法】タブレット端末の記録			

2　社会科（第６学年　単元名「縄文の村から古墳のくにへ」）

＜小単元の目標＞

知識及び技能	①　世の中の様子、代表的な文化遺産などについて、遺跡や地図、年表などの資料で調べ狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）による統一の様子を理解する。 ②　調べたことを年表や文などにまとめ、むらからくにへと変化したことを理解する。
思考力、判断力、表現力等	①　世の中の様子、代表的な文化遺産に着目して問いを見いだし、狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）について考え、適切に表現する。 ②　狩猟や採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）による統一の様子を関連付けたりして、世の中の変化の様子を考え、適切に表現している。
学びに向かう力、人間性等	狩猟・採集や農耕の生活、大和朝廷（大和政権）による統一の様子について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、学習問題を追究し、解決しようとする。

＜本時の目標＞　５／７

○　古墳の大きさや出土品などの様子から、くにづくりを進めた王や豪族たちの力の大きさについて理解する。　【知識及び技能】

○　問題解決のために調べたいことを決め、そこから学習問題の答えを考えることができる。　【思考力、判断力、表現力等】

＜小単元計画＞

	主な学習内容	定着	深化
1	縄文のむらのくらしのようすに関心をもち、気付いたことを話し合う。	○	
2	米作りが始まったころのむらや人々の様子について関心をもち、気付いたことを話し合う。	○	
3	縄文と弥生の村では米作りの始まりによって、村の様子が変化したことを基に学習問題を見いだす。	○	
4	米作りの広がりによって、村の様子がどのように変わっていったかを調べる。	○	
⑤	古墳づくりの目的・王や豪族たちの力の大きさについて考え、話し合う。	○	
6	国土がどのように統一されていったのかを調べる	○	
7	新聞にまとめる。	○	○

定着…　一定の目標を全ての児童が達成することを目指し、個々の児童に応じて異なる方法等で学習を進められるよう働きかけを工夫する。（指導の個別化）

深化…　個々の児童の興味・関心に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げられるよう働きかけを工夫する。（学習の個性化）

＜本時で期待する自立した学び手の姿＞

A（決める）
児童の疑問から調べたいことを絞り、解決の柱の中から、自分に合った課題を選択することができる。

→

A（やってみる）
一人で調べたり、友達と相談しながら調べたりと自分に合った、解決の仕方を見付けてやってみることができる。

→

R（振り返る）
学びを自己評価したり、次の学習に生かしたりできるように 150 字程度でまとめることができる。

〈本時の実際〉

アイコンの意味	「課題・めあて」の選択・決定	「解決方法・考え方」の選択・決定	「道具・活動」の選択・決定	「学習形態・スタイル」の選択・決定	「学習時間・ペース」の選択・決定	ICT の活用

過程(分)	主な学習活動		教師の具体的な働きかけ	
決める (7)	1　古墳の資料から、疑問を出す。 どうしてこんなに大きいのだろう。 中には何が入っているのかな。 2　学習問題を立てる。 仁徳天皇は、何のために大きな古墳を作らせたのだろうか。 3　問題解決のための柱を考える。 (1)　かかった時間、人、お金について (2)　どうやって作ったか (3)　他の古墳はどうか	定着	○　古墳とは何かを全体で確認した後、大仙古墳の大きさが分かるように現代の墓と比べたり、柁城小校区にあるとどのくらいかを提示したりし、児童が疑問を抱くことができるようにした。 ○　児童の言葉で学習問題を立てるように促した。 ○　児童の疑問から、調べたいことをいくつかの柱に絞り、グループで誰がどの柱について調べるか役割を分担できるようにした。 	
やってみる (30)	4　同じ柱の友達と調べ学習を行う。 5　調べたことを班で持ち帰り、学習問題の答えを考える。(グループ) 作った人もかかったお金もたくさんだから、それくらいの力をもった人だったのかな。 仁徳天皇も強い権力をもった人だったよ。だから古墳も大きくしたのかな。		○　一人で調べたり、友達と相談しながら調べたりするなど、児童が自分に合った調べ方ができるようにした。 ○　教科書、資料集、インターネットなど児童が調べ方を決定できるようにする。調べたことは、学習支援アプリやノートにまとめておくようにした。 ○　調べたことを班で照らし合わせ、学習問題の答えを導き出すことができるよう促した。	
振り返る (8)	6　本時の学習内容を振り返る。 仁徳天皇は、自分の力を示すために大きな古墳を作った。 7　本時の学習を振り返る。 ・　教科書や資料集を使って調べることができた。 ・　豪族は、お墓でも自分の力を示そうとしたことが分かった。		○　学びが自分事になるよう自分の言葉でまとめるよう促した。 ○　学びを自己評価したり、次の学習に生かしたりできるように、学習到達度や学び方を振り返るよう促した。 ○　振り返りは学習支援アプリで行い、毎時間の振り返りをログ化しておくことができるようにした。 	
評価	【観点】知識・技能、思考・判断・表現　　【方法】ノート記述、発言			

3　算数科（第５学年　単元名「分数のたし算とひき算」）

＜単元の目標＞

知識及び技能	約分・通分の意味、異分母分数の大小比較の仕方や、異分母分数の加法及び減法の意味や計算の仕方を理解し、約分や通分、異分母分数の加法及び減法の計算ができている。
思考力、判断力、表現力等	異分母分数の大小比較の方法を考えたり、異分母分数の加法及び減法の計算の仕方を、図や式を用いて考えたりできている。
学びに向かう力、人間性等	異分母分数の大小を比べる方法に関心をもち、異分母分数の加法及び減法の計算の仕方を考えようとすることができている。

＜本時の目標＞　３／11

○　分数の大きさを変えずに分母と分子を小さくする活動を通して、最大公約数で割ると計算が速いことに気付き、約分の意味と約分の仕方を理解することができる。

定着…　一定の目標を全ての児童が達成することを目指し、個々の児童に応じて異なる方法等で学習を進められるよう働きかけを工夫する。（指導の個別化）

深化…　個々の児童の興味・関心に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げられるよう働きかけを工夫する。（学習の個性化）

＜単元計画＞

		主な学習内容	定着	深化
1	大きさの等しい分数	・２つの分数の大きさが等しいかどうか調べる方法を考える。	○	
2		・大きさの等しい分数の分母や分子の間の関係を調べ，同値分数を見付ける。	○	
③		・約分の意味を知り、１回で約分するには、分子と分母の最大公約数で約分すればよいことに気付く。	○	○
4		・異分母分数の大きさを比べる方法を考え、大小比較をする。通分を知る。	○	○
5		・いろいろな分数を通分して、大小比較をする。	○	○
6	分数のたし算	・異分母分数の加法は、分母を同じにすれば計算できることに気付く。答えはできるだけ簡単な分数にし，答えが１より大きくなる場合の異分母分数の加法の計算の仕方を考える。	○	
7		・帯分数の加法の計算の仕方や真分数部分の和が仮分数になったときの処理の仕方を考える。	○	○
8	分数のひき算	・異分母分数の減法の計算の仕方を、同分母分数の計算の仕方を基に考え、異分母分数の減法も、加法と同じように通分すれば計算できることを知る。（仮分数）－（真分数）の計算の仕方を考える。	○	
9		・帯分数の減法の計算の仕方や真分数部分の減法ができなかったときの処理の仕方を考える。		○
10		・一つ一つ計算していくのか、最初に通分して計算して処理していくのか、どちらが速く計算しやすいのかを考える。		○
11	単元末	【できるようになったこと・まなびをいかそう】 【考え方モンスターでふりかえろう！】		○

＜本時で期待する自立した学び手の姿＞

A（決める）

「定着」場面では、異なる考え方の児童を見付け、意見交流ができる。「深化」場面では、最大公約数の復習、約分の練習、大小比較の中から自分に合った課題を選択することができる。

A（やってみる）

一人で課題に挑戦したり、友達と協力しながら学び合いをしたりする中で、自己の課題に応じた問題をあきらめずに学習することができる。

R（振り返る）

分かったことやできるようになったことを自覚するとともに、学び方を分析し、振り返りシートに 100 字程度でまとめることができる。

＜本時の実際＞

アイコンの意味	「課題・めあて」の選択・決定	「解決方法・考え方」の選択・決定	「道具・活動」の選択・決定	「学習形態・スタイル」の選択・決定	「学習時間・ペース」の選択・決定	ICT の活用

過程(分)	主な学習活動		教師の具体的な働きかけ	
決める(5)	1　学習課題を受け止める。 「ピザを$\frac{12}{18}$ください」をもっと店員さんに伝わりやすく言い換えましょう。 ・　分母と分子を同じ数で割ればよかったな。 ・　$\frac{2}{3}$かな。$\frac{4}{6}$かな。もっと小さくできるかな。 2　学習課題を焦点化する。 分数の大きさを変えずに、分母と分子をもっとも小さくするにはどうしたらよいだろうか。	定着	○　生活場面を取り上げ、できるだけ小さな分数で伝えた方が数の大きさをイメージしやすいことに気付くように促した。 ○　前時を振り返りながら、分数の分母と分子を同じ数で割っても分数の大きさは変わらないという決まりを思い出させることで、できるだけ小さな数を探してみたいという興味・関心につなげ、本時のめあてを設定するようにした。	
やってみる(35)	3　自分なりの方法で考え、気付いたことを話し合う。 ・　小さくする方法を教えて。 ・　図や数直線で考えてみたよ。 ・　２と３で割れるよ。 ・　６で割ると一回で済むよ。 4　約分という言葉を学習し、１回で約分する方法を考える。 ◆　一般的に、分母と分子の数が最も小さくなるまで約分することを知る。 ◆　最大公約数の求め方を振り返る。 5　本時の学習内容について確認する。 分母と分子の最大公約数で約分すると、１回で約分できる。 6　自分の課題に合った目標を設定し、個々のペースで学習を進める。 基礎プリント 発展問題（むず・超むず問題）	深化	○　約分を理解し計算で求めることのできる児童へは、１回で済む方法を考えさせたり、悩んでいる児童への言葉掛けを促したりした。また、支援を要する児童へは、教科書に書き込ませたり、学び合いを促したりした。 ○　「約分」とは、一般的に最も小さくなるまで約分することを知らせた。 ○　簡単に分母と分子の最大公約数が見付かるときは最大公約数で約分すればよいが、そうでないときには２や３など小さい公約数で割っていけばよいことを確認させた。 ○　自己の課題を把握するために、約分の例題を１問提示する。その出来具合に応じて「深化」場面の選択に生かすよう声掛けを行った。 ○　自己選択したプリントが終わった児童は、他コースのプリントを解いたり、他児童へのアドバイスに回ったり、タブレット端末で問題を解いたりと、新たな自己選択ができるよう働きかけた。	
振り返る(5)	7　本時の学習方法について振り返る。 学習支援アプリの振り返りシートに、本時で選択した学び方とその自己評価を記入する（目標 100 字）。 		○　本時はサイクルを２回回したことを伝え、どこでどんな選択をしたのかを思い返させ、方法面の振り返りをしやすくした。	
評価	【観点】知識・技能　　【方法】ノート・タブレット端末の記録			

4　理科（第５学年　単元名「物の溶け方」）

＜単元の目標＞

知識及び技能	①　物が水に溶けても、水と物とを合わせた重さは変わらないことを理解している。 ②　物が水に溶ける量には、限度があることを理解している。 ③　物が水に溶ける量は水の温度や量、溶ける物によって違うこと、また、その性質を利用して、溶けている物を取り出すことができていることを理解している。 ④　観察、実験などの目的に応じて器具や機器などを選択して、正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を適切に記録している。
思考力、判断力、表現力等	①　物の溶け方について、予想や仮説を基に、解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。 ②　物の溶け方について、実験などを行い、得られた結果を基に考察し、表現するなどして問題解決している。
学びに向かう力、人間性等	①　物の溶け方についての事物・現象に進んで関わり、粘り強く、他者と関わりながら問題解決しようとしている。 ②　物の溶け方について、学んだことを学習や生活に生かそうとしている。

＜本時の目標＞　５，６/14

食塩とミョウバンの溶ける量について、条件を制御しながら調べ、物が水に溶ける量には限りがあることや、物によって溶ける量に違いがあることを捉えることができる。

＜単元計画＞

	主な学習内容	定着	深化
1	水に溶けて見えなくなった食塩の行方について予想し、調べる方法を考える。	○	
2・3	水に溶けて見えなくなった物の行方を調べまとめる。	○	
4	物が水に溶けることを図や絵などを用いてまとめ、水溶液について知る。	○	
5・6	物が水に溶ける量には限りがあるのか実験し、結果をまとめる。	○	
7	水の量や温度によって物の溶ける量は変わるのか予想し、調べる方法を考える。	○	
8・9	水の量や温度によって物の溶ける量は変わるのか実験する。	○	
10	実験した結果をまとめる	○	
11・12	水に溶けた物は、どうすれば取り出せるのか予想し、調べる。	○	
13 14	結果をまとめ、単元全体を振り返る。	○	○

定着…　一定の目標を全ての児童が達成することを目指し、個々の児童に応じて異なる方法等で学習を進められるよう働きかけを工夫する。（指導の個別化）

深化…　個々の児童の興味・関心に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げられるよう働きかけを工夫する。（学習の個性化）

＜本時で期待する自立した学び手の姿＞

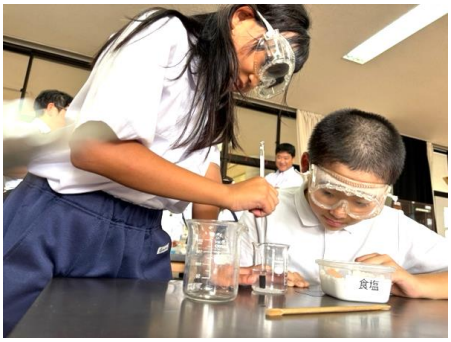
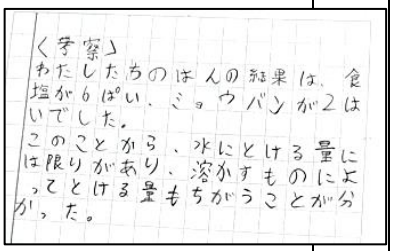
A（決める）
どんな手順で実験すればよいか、どんなものを用意すればよいかなど、ペアで実験方法を話し合い、決定することができる。

A（やってみる）
ペアで話し合いながら自分たちで選択した方法で実験することができる。

R（振り返る）
事実を基に、食塩とミョウバンの結果の共通点と差異点に着目して考察をまとめ、自分の学び方を振り返り、次に生かしたいことを表現することができる。

＜本時の実際＞

アイコンの意味	「課題・めあて」の選択・決定	「解決方法・考え方」の選択・決定	「道具・活動」の選択・決定	「学習形態・スタイル」の選択・決定	「学習時間・ペース」の選択・決定	ICT の活用

<table>
<tr><th>過程</th><th>主な学習活動</th><th></th><th>教師の具体的な働きかけ</th><th></th></tr>
<tr><td>決める
(45)</td><td>1　第１時で観察した食塩が水に溶けていく様子を想起し、学習問題を立てる。
物が水に溶ける量には、限りがあるのだろうか。
2　各自で予想する。
・　砂糖を何回混ぜても溶けないことがあったので、限りはあると思う。
・　第１時での食塩の様子を思い出すと、いくらでも溶けると思う。
3　ペアで実験方法を話し合い、決定する。
・　どんな手順で実験すればよいかな。
・　どんな物を用意するとよいかな。
・　気を付けることは、何かな。
・　メスシリンダーは、どのように使うのだろう。</td><td rowspan="3">定着</td><td>○　問題意識を高めるために、第１時での気付きや疑問点を提示する。
○　予想を立てる際には、「私が前に～したときには～だったので、～だと思います。」など、既習の内容や生活経験に基づいた根拠が明確に分かる表現をするように促した。
○　予想に基づいた結果の見通しをもってから実験を行うようにした。
○　メスシリンダーの使い方は、教科書掲載の二次元コードを読み取って確認するように働きかけた。また、正しく扱うことができるかを確かめるために、操作の意図について発問したり、パフォーマンステストをしたりした。</td><td></td></tr>
<tr><td>やってみる
(35)</td><td>4　ペアで実験を行い、記録を整理する。
5　結果を共有する。
（例）<table><tr><th>溶かした物</th><th>食塩</th><th>ミョウバン</th></tr><tr><td>50mL の水に溶けた量</td><td>すり切り６はい</td><td>すり切り２はい</td></tr></table>   </td><td>○　結果を共有する際には、調べた順序や得られた結果を整理して考察し、発表するように働きかけた。
○　結果が大きく違った場合には、その原因を問う発問をした。
○　結果の妥当性を検討できるように、溶かした物による共通性に着目することで一般化を図ることができるようにした。</td><td></td></tr>
<tr><td>振り返る
(10)</td><td>6　本時の学習内容と自分の学び方を振り返る。
食塩もミョウバンも溶け残った。このことから、物が水に溶ける量には限りがあり、物によって溶ける量に違いがあると考えられる。
同じ水の量にして比べることは、大事だな。正しい水の量り方を知れてよかった。</td><td>○　事実を基に、食塩とミョウバンの結果の共通点と差異点に着目して考察をまとめるように働きかけた。
○　振り返りは、ＩＣＴを活用し学びを蓄積するようにした。
○　自分の学び方を振り返り、次に生かしたいことを記録するように働きかけた。</td><td></td></tr>
<tr><td>評価</td><td colspan="4">【観点】知識・技能　　【方法】発言分析・記述分析</td></tr>
</table>

5　体育科（第４学年　単元名「マット運動」）

＜単元の目標＞

知識及び技能	回転系や巧技系の基本的な技をすることができるようにする。（開脚後転や側方倒立回転、首はね起き）
思考力、判断力、表現力等	自己の能力に適した課題を見付け、技ができるようになるための活動の工夫をするとともに、考えたことを友達に伝えている。
学びに向かう力、人間性等	マットを使った運動に進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしようとし、友達の考えを認めたり場や器具の安全に気を付けたりすることができるようにする。

＜単元計画＞

	主な学習内容	定着	深化
1	オリエンテーション できる技の確認	○	
2	開脚後転に挑戦	○	
3	側方倒立回転に挑戦	○	
4	側方倒立回転、発展技に挑戦	○	○
5	首はね起きに挑戦	○	
6	撮影会及び発表会		○

定着…　一定の目標を全ての児童が達成することを目指し、個々の児童に応じて異なる方法等で学習を進められるよう働きかけを工夫する。（指導の個別化）
深化…　個々の児童の興味・関心に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げられるよう働きかけを工夫する。（学習の個性化）

＜本時の目標＞　４／６
○　自分の能力に合った倒立技（腕立て横飛び越し・側方倒立回転）ができる。【知識及び技能】
○　友達と交流する中で、自分の課題に気付き、自分の力に合った練習方法や練習の場を選んでいる。【思考力、判断力、表現力等】

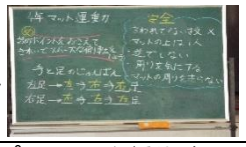
＜本時で期待する自立した学び手の姿＞

A（決める）
「安定した支持」、「腰や足の高さ」、「真っ直ぐ進む」の中から自分に合った課題を選択することができる。

A（やってみる）
例）友達と動きを確認しながら自分の動きを知り、課題に応じた場で練習することができる。

R（振り返る）
できるようになった技や動きを自覚するとともに、上達できた理由を分析し、振り返りシートに50～100字程度でまとめることができる。

＜本時の実際＞

	児童の主な活動		教師の具体的な働きかけ	
決める（10）	1　健康観察をし、学習のめあてを確認する。 技のポイントをおさえて、きれいでスムーズな側転をしよう。 2　場の準備をする。 3　準備運動、補助運動をする。 →　「小学生の体育」（p.16-17）参照		・　安全に学習できる場について，何を選択・準備すればよいか考えるよう促した。 ・　自分の課題を解決するために，技のどのポイントに気を付けて練習するか選ぶことができるようにした。 	
やってみる（27）	4　今日の活動を選択し、練習する。 「足・手の設置」 ・跳び箱1～3段 「足や腰の高さ」 ・テープタッチ ・壁倒立 「真っ直ぐ進む」 ・センターライン ・段ボール 5　ミニ発表会をする。 側方倒立回転をグループ・ペア内で発表し、意見交流をする。 6　新たな目標を立て、練習する。 「部分練習」 ・安定した支持 ・足や腰の高さ ・真っすぐ進む 「よりきれいに」 ・側方倒立回転 「発展技」 ・ロンダート ・連続技	定着 深化	・　自分が選択したポイントを撮影者に伝えて動画に記録してもらうようにし，動画を基に意見交流をするよう促した。 ・　練習後にミニ発表会の活動を計画することで，自分なりの新たな目標に気付くことができるようにした。	
振り返る（8）	7　場の片付けをする。 8　健康観察をし、整理運動をする。 9　学習を振り返る。 学習支援アプリの振り返りシートに、本日の動きの動画と上達できた理由を記録する。（目安 80字）		・　選択したポイントを基に練習した成果について，文字数を限定して記録するようにする。撮影した動画も保存するようにした。	

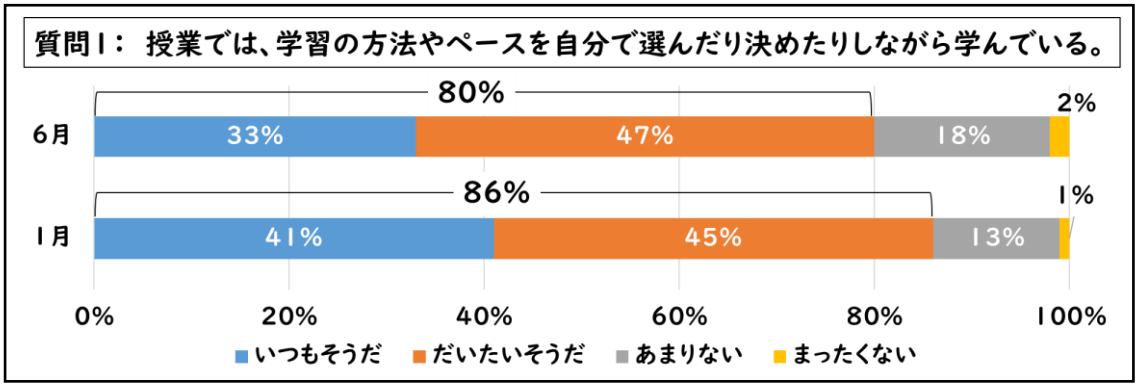
Ⅴ　研究の成果と課題

1　研究の成果

児童の意識の変容を把握するために、本校３～６年生 233 人を対象にアンケート調査を実施した。調査時期は、１回目が令和６年６月、２回目が令和７年１月である。

(1)　学び方を自己決定する場の在り方について

本校版 AAR サイクルを作成し、「定着」と「深化」を意識した指導を進めたことで、児童に委ねる場面が多くなり、主体的に自己決定して学ぶ児童の姿が多く見られるようになった。



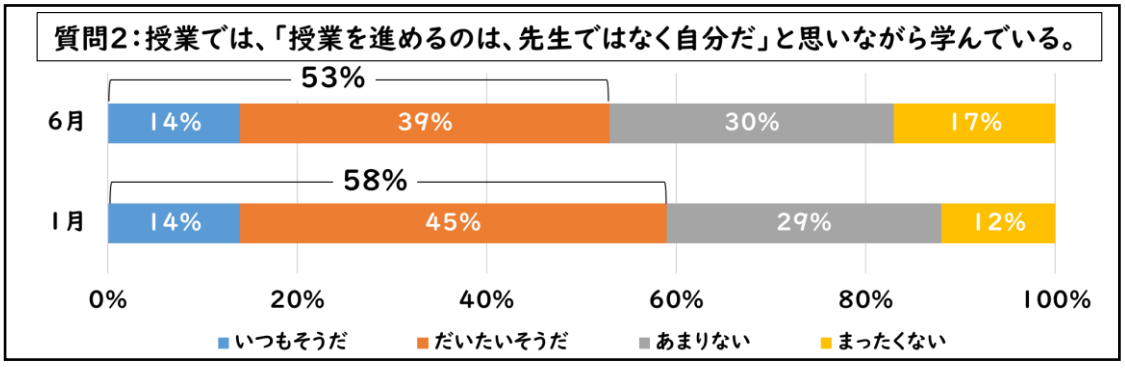
(2)　学び方を振り返る場の在り方について

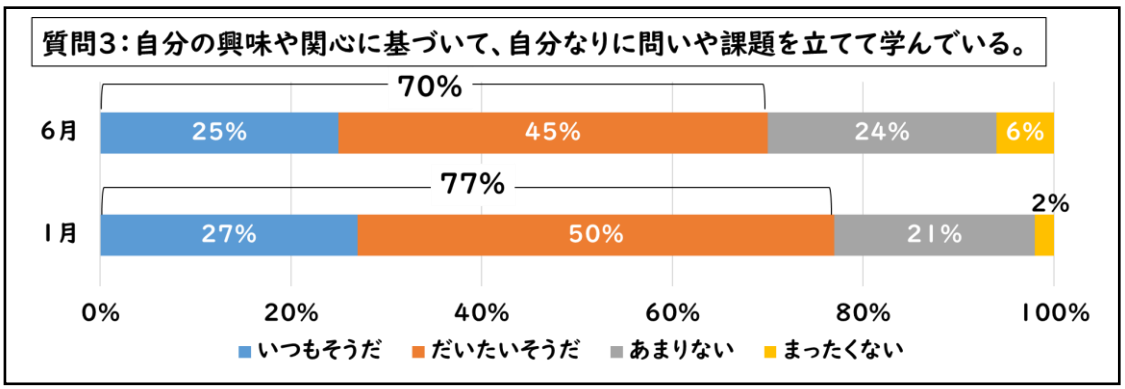
目指す児童像を全職員で共通理解し、学習内容面だけでなく方法面にも着目した振り返りを促す中で、学び方について自分なりに工夫したり、主体的に学ぼうとしたりする児童の姿が増えた。

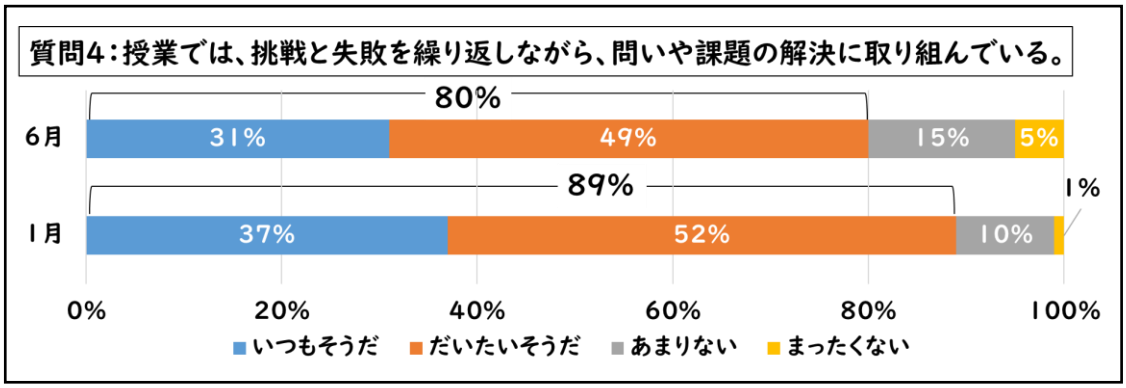
<5年児童の感想>

今日は２人で答えを求めたので次は１人でやってみて、自分に合うやり方を探してみたい。黒板などでも書いてみたりして、自分に合うやり方を探したいと思う。

仲のいい友達と一緒にしました。タブレットで分速の求め方を調べて筆算で求めました。もうちょっと計画を立てて勉強したいです。







⑶　習慣化を図る取組について

共通実践事項の設定及び実践の積み重ねや、普段の学校生活における意欲付けの成果もあり、児童は学んだ内容や方法を自然と蓄積できるようになってきている。日々の実践に当たっては、毎時間振り返りを行った方が効果的なのか、小単元ごとの振り返りが効果的なのか単元や教科に応じて頻度を工夫する様子も見られる。また、振り返りの質が向上してきており、各教科等の見方・考え方を働かせた振り返りが見られるようになってきている。

2　今後の課題

・　学力の指標の一つである鹿児島学力・学習状況調査や全国学力・学習状況調査、NRTについては現時点で実施していないため、本研究における取組とこれらの結果との相関については今後、検証していく必要がある。その際は、学力調査の結果のみならず、学習状況調査の結果も考慮するとともに、複数年に渡る検証に努める必要がある。

・　蓄積したスタディ・ログを児童が見返し、今後の学習に生かしていけるよう働きかけていくことが主体的に学習に取り組む態度を育成する上で必要である。その際、各教科等の特質に応じた学び方を児童がより意識し、問題解決に取り組んでいけるようになることが大切だと考える。各教科等の実践に当たっては、問題解決に役立った各教科等の見方・考え方を児童が自覚的に働かせていくことができるよう手立ての工夫を図っていく必要がある。

【主な参考文献】

１）文部科学省「第４期教育振興基本計画」令和５年６月 16 日
２）鹿児島県教育委員会「教育振興基本計画」令和６年２月
３）姶良市教育委員会「教育振興基本計画」平成 24 年３月、「第２次教育振興基本計画」令和４年３月）
４）鹿児島県教育委員会鹿教義第 432 号「『主体的・対話的で深い学び』の視点からの一層の授業改善に向けて（通知）」令和５年３月 31 日
５）鹿児島県教育委員会「学びの羅針盤」令和６年３月
６）姶良市立柁城小学校「令和３・４年度姶良・伊佐地区研究協力校（学力向上：ICT 活用）研究紀要」令和４年 10 月 27 日
７）中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」令和３年１月 26 日
８）鹿児島県教育委員会「令和５年度心の教育振興会議提言　学校・家庭・地域で育む『かごしまっ子の心』」令和６年３月

9）文部科学省「OECD 生徒の学習到達度調査 PISA2022 のポイント」令和５年 12 月５日
10）文部科学省「生徒指導提要」令和４年 12 月
11）鹿児島県総合教育センター研究紀要第 128 号「学習者主体の学びのデザイン」令和6年3月
12）中園新長「スタディ･ログ」とは?【知っておきたい教育用語】みんなの教育技術 令和4年1月 24 日
13）文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック（小･中学校編）令和元年6月

【研究同人】

校長	有村 和章	教諭等	南 志保
教頭	北 和幸		前田みどり
教諭等	瀬戸口 有真		徳森 健一
	川畑 明博		福永 ゆかり
	吉田 明広		羽生 博文
	徳守 志歩		米田 千尋
	久留 亜紀		向井 智子
	西 祐子		溝江 美千代
	森園 賢清		福留 由美子
	中江 太郎		池邉 貴康
	勇島 海斗	養護教諭	濱畑 千明
	濵田 一平	事務主査	小川 大輔
	加美 桃花	司書補	乗添 郁代
	田畑 貴充	用務員	盛 正一
	永井 秀樹	特別支援教育支援員	中村 陽子
	井上 栞里		穂園 三佳
	和田 郁衣		比良 みゆき
	佐多 美父代		松村 由美
	水田 和樹	教員業務支援員	原田 道代
	下新原 安奈	事務補	堀田 雅子

【旧研究同人（令和5年度）】

宮路 公貴	蛯原 靖雄	山下 真司	折田 健
松元 さゆり	荒島 弘和	植田 大地	太田 順子

自立した学び手を育てる学習指導の在り方
－学び方の自己決定と振り返りの習慣化を通して－

編集／発行	姶良市立柁城小学校
	〒899-5214 鹿児島県姶良市加治木町仮屋町248 TEL 0995-63-2552 FAX 0995-63-2554
発行年月日	令和７年２月 13 日